

真理と表徴

—パスカル「パンセ」についての一考察—

広 田 昌 義

キリスト教の眞理性証明を目標として執筆された草稿の集積が、ブレーズ・パスカル「パンセ」の骨組を形成しているが、「パンセ」第一写本の構成が示すように、そしてまたいくつかの断章に明記されているように、パスカルの「キリスト教弁証論」の構成は大きく次の二つの部分に分けられるはずであった。第一部は「人間性が墮落していること」を「人間性そのものによって」証明し、

第二部においては、「救済者 Réparateur が存在すること」を「聖書によって」論証するといふのである。⁽¹⁾この

第二部では、旧約・新約の両聖書の参照、特に旧約聖書のメシアに関する予言を新約聖書の記述と対照するといふ操作によって、人間の《悲惨》の救済者がキリストで

あることを歴史的に証明するという手続きが取られるはずであった。この際、旧約と新約両聖書の理解のために、パスカルは《表徴 Bible》という概念を用いる。この《表徴》についてのパスカルの思想、特にそれと彼の眞理観との関係について考えてみるのが、本稿の目的である。

—

《表徴》としての聖書

《矛盾》

われわれがもつ全ての相反した点を一致させるのでな

ければ、正しい人物像をつくることはできない。相反する点を一致させることなく、一連の一致した諸性質を辿るだけでは充分ではない。一人の著者の真意を理解するためには、相反する全ての章句を一致させねばならない。

同じく聖書を理解するためにも、そこにおいて全ての相反する章句が一致するような、ひとつの意味を把握しなければならぬ。一致するいくつもの章句に適合する意味を把握するだけでは不十分である。相反する章句をも一致させるような意味を把握しなければならない。

著者は全て、そこであらゆる相反する章句が一致するような意味をもっているか、あるいは全く意味をもっていないかのどちらかである。聖書と予言者たちについては、そういうことはできない。「そういうためには」それらはあまりに多くの正しい意味をもっていることは明らかである。それゆえ、全ての相反する点を一致させるひとつの意味をそこに探し求めなければならない。

[……]

〔旧約聖書の〕律法、犠牲、王国などを、實在 Realities と考えるならば、全ての章句を一致させることはできない。それらは、それゆえ、必然的に表徴 *typical* にすぎ

ないことになる。〔……〕(断章・L・二五七—B・六七五)

右のようにパスカルが述べる時、《表徴》とは彼にとって、対象の整合的解釈を可能にするひとつの知的・操作的概念であるかのように思われる。この印象は、《旧約は一つの符号 *signe* である》(L・二七六—B・六九一)とパスカルが述べ、《二重の意味をもつ符号。ひとつは、明白な意味。そして意味は隠されていると言われる場合》(L・二六五—B・六七七)、《符号は二つの意味をもつ。ひとつの重要な手紙を奪った場合、そこに明白な意味は読めるが、にもかかわらずその手紙の意味は覆いかくされており、その手紙は見ても分らず、聞いても理解されないと言われている場合、その手紙は二重の意味をもつ符号と考えざるをえないのではないか?》とパスカルが言う時、ますます強く感じられる。対象の内部に先ず矛盾を見出し、その矛盾を解決して対象の内的整合性を回復させるためのひとつの概念を提示し、それによって対象を《理解する》、《解読する》という手続きは、ひどく知的な操作に思えるのである。

旧約聖書の解釈のために、《表徴》の概念を利用する

方法は、パスカルの同時代の神学者たちの間に多く見られ、パスカルも十八世紀初頭のある神学者によって、それら〈表徴主義者 Fictivistes〉の一人として名前を挙げられることになる。⁽⁶⁾この〈表徴主義者〉の筆頭は、ジャンセニウス Jansenius であり、彼の名著「アウグスチヌス」の中には、旧約聖書は新約聖書を表徴する偉大な劇であると記されていたのである。⁽³⁾この表徴主義的聖書解釈に対して、字義的聖書解釈が存在していたし、当時より一般的な聖書解釈の方法は後者であった。⁽⁴⁾字義的聖書解釈によれば、新約の予言が、字義的に旧約の中に表明されているということになる。これは、パスカルの厳密な精神の受け入れるところとならなかった。字義的にのみ理解しようとする場合、新約と旧約の間にはあまりに多くの矛盾があるとパスカルは考え、多くの断章でその諸矛盾について記している。そのいくつかの例を挙げてみれば、例えば旧約聖書では、メシアはユダヤ民族をその《敵》(すなわちエジプト人あるいはバビロニア人)の手から解放して全世界の支配者とするために現われる、と記されているが、新約に現われたキリストはユダヤ人たちが期待していた栄光につつまれてはいなかつ

た。また、旧約聖書においては、《眼には眼を》の原理が道徳の基礎にあり、律法の厳守が命令されているが、新約においてキリストは、《汝の敵を愛せ》という道徳を説き、律法の破棄を命じている。あるいはまた、より細かい点を挙げるならば、旧約においては成年男子は割礼を受けねばならぬとされているが、新約においてはキリストの使徒たちはその必要性を否認したのであった。⁽⁵⁾以上のような諸矛盾は、聖書を字義的に読む場合には解決できない。そこでパスカルは、今挙げたような諸矛盾を〈表徴的に〉解釈するのである。《地上の王》として旧約に予言されているメシアは、精神界の王、キリストの表徴であり、旧約に言う《敵》とは、人間の情欲あるいは罪の表徴であり、旧約で命じられている身体の割礼は、心の割礼の表徴であるとパスカルは解する。⁽⁶⁾このような表徴的解釈の正当性の根拠は、旧約に現われた予言者たちの言説に含まれている諸矛盾それ自体の中にあるとパスカルは主張する。すなわち、《彼ら〔予言者〕の言説は地上的幸福の約束を非常に明確に表明しているが、にもかかわらず彼らは自分たちの言説は曖昧なものであり、その意味は理解されないのである」と述べている。それゆ

え、その隠された意味は、彼らのはっきりした形で表明しているものは全く異なっていたのだ》《彼らの言説は相反するものであり相対立するものである。したがって、彼らは律法や犠牲いけにえという言葉によって、モーゼのそれ以外のものを言おうとしていたのだと考えなければ、そこには明白で甚だしい矛盾があることになる。それゆえ、時折同じ章において矛盾したことを述べている時には、彼らは他のことを言おうとしていたのである》(L・五〇—B・六五九)。旧約聖書自体が、その諸矛盾を明瞭に表明することによって、《解読》という操作を要請しているとパスカルは考える。

この《解読》の鍵は、注意深く読めば旧約聖書の中にも見出せるが、この《二重の意味をもつ符号》の解読を可能にする《表徴》の概念は、イエス・キリストとその使徒たちによってもたらされたパスカルは言う。

《この符号をわれわれに明らかに示して、隠された意味を知ることが教示してくれた人々を、どれほど尊重しなければいけないことか！ とくにそこから彼らが引き出す諸原理が全く自然で明快なものである場合には！ そのことこそイエス・キリストとその使徒たちがなされ

たことである。彼らは封印を解いて下さったのだ。キリストは覆いを破って精神を明らかに示して下さいましたのである》(L・二六〇—B・六七八)

こうして、聖書を合理的・整合的に理解するための《表徴》という概念は、神(キリスト)によって与えられたものであることが明らかにされる。それゆえ、この概念は、普遍的なもの、全ての人にも与えられるのではなく、信仰の光によって始めて与えられるのである。そこでパスカルは、《ある人々を盲目に、ある人々に光を与えるためにつくられたこの聖書》と言うのである。この点にもパスカルの思想における理性と信仰との関係が現われているのであって、パスカルは信仰に関する事柄において理性を排斥しているのではなく、真の理性的思考は信仰によって始めて可能になると考えているのである。ともあれ、《表徴》という鍵を与えられて、《ひとたびこの秘密が開かれれば、それを見ないことは不可能である。この見方によって旧約聖書を読んでみるがよい。そして〔旧約の〕犠牲いけにえが真のものであったか、アブラハムとの血縁が神の愛情を与えられる真の原因であったか考えるがよい。否、そうではなかった。すなわち、それ

らは表徴であったのだ》(L・二六七―B・六八〇)このようにして、《あらゆることは彼らにとって表徴として起った》(L・二五三―B・六七九)のであり、《旧約聖書のなかには、来るべき喜びの表徴があり、新約聖書のなかには、それに到達するための方法がある》と考えられることになる。

聖書解釈についての、以上のようなバスカルの《表徴主義》的立場については、次の点が特に注意されなければならぬ。

第一に、バスカルは旧約・新約の全ての記述を表徴として解してはいない、という点である。バスカルの主張は、記述に明白な矛盾がある時に、その矛盾自体が表徴的な解釈を要求しているのだと主張しているのであって、例えば新約聖書の記述のほとんど全てがそうであるように、そこに何ら明白な矛盾や相反が含まれていない場合にも表徴的解釈を行なうことに賛成しているのではない。例えば新約における《聖変化》を表徴とみなして、パンと葡萄酒の中にキリストの肉と血が現存していることを否認するカルヴァンの異端にバスカルが同調する訳ではない。⁽⁸⁾しかしながら、バスカルの思想は、正統的カトリ

ック信仰の許す範囲内で、可能な限り《表徴的》解釈を一般化しようとする。この点は同じジャンセニストの、アルノー Arnaud やニコル Nicole のような神学者の立場とは、根本的なところで相異なっている。⁽⁹⁾すくなくとも、ポール・ロワヤルの中で、バスカルの表徴的思考が独自のものであったことは、彼がその「キリスト教弁証論」の構想についての講演をポール・ロワヤル修道院で行なった際、聴衆を最も感嘆させた論点が、彼の旧約聖書解釈の方法であったという証言があることからも、充分に推察されるのである。⁽¹⁰⁾

第二に注意すべき点は、バスカルの《表徴主義》と、彼の《隠れたる神 Deus absconditus》の思想との密接な関連である。《表徴》を可視的なものとし、次いでそこに隠されている精神を明らかに示したのは、キリストとその使徒であるとバスカルが述べていることはすでに記した。それゆえ、表徴的理解に至るためには、先ずキリストに至らなければならない。すなわち《表徴》は、神の恩寵と神を求める人間の努力が幸福な一致を見る時にはじめて認識され理解されるのである。その意味で、《表徴》はまさに、《不在と現存》、《隠れたる神》の現

存を示しており、そこに《表徴》されているもの *figure*《
を見出す努力は、《神の不在としての神の現存》を認め
る努力に相等的い。

二

《表徴》としての自然—本性

《……この世界に現われているものは、神性の全面的
な排除でも明白な現存でもなく、自らを隠している神の
現存である。すべてのものはこの徴 *caractère* を有して
いる》(L・四四九—B・五五六)⁽¹¹⁾

《隠れたる神》の徴を有するものとは、すなわち《表
徴》として立ち現われるものである。パスカルの眼には、
全世界が《表徴》によって構成されていると見えていた
のである。

パスカルの機械論的宇宙観の最も端的な表明と一般に
考えられている、《二つの無限》⁽¹²⁾の断章においても、《こ
れ〔事物・実在Ⅱ宇宙〕は、中心がいたるところにあり
周辺はどこにもない無限の球体である》という一句——
《このとらえ方と表現において「宇宙像と無限の観念」

についてのパスカルのすべての考え方は収斂して》おり、
《そして「二つの無限」についての断章のこれにつづく
部分は、その内容を展開したもの》⁽¹³⁾と評されている一句
の直後に、パスカルが次のように書き加えていることは
見逃がされてはならないであろう。

《すなわち、われわれの想像力がその〔無限の球体と
いう〕思考の中で自らを見失ってしまうことこそ、神
の全能についての感知しうる最大の徴である》。(L・一
九八—B・七二)

この同じ断章の中で、パスカルはまた、自然がもつ二
つの無限性(大なる無限と小なる無限)は《創造者の影
像》であるとも述べているのである。

しかし、このことは、可視的自然界が神の現存の証明
となっているということではない。パスカルと同時代の
キリスト教弁証論の著者たちの多くは、ポール・ロワヤ
リストも含めて、可視的自然界の秩序、美が、神の存在
を雄弁に物語っていると主張していたの⁽¹⁴⁾に対して、パス
カルは自然とは《神が自らを隠している》ことを示す
《表徴》であって、それ故、《無限の空間》は神の現存を
開示することなく《永遠の沈黙》⁽¹⁵⁾を続けるのだと断言す

る。いわゆる自然神学の方向に向うならば、神学と科学との協同は充分に考えうるであろうし、当時の自然科学的研究の諸成果はしばしばキリスト教弁証論の論拠として用いられていたのであったが、パスカルの立場から見る場合可視的自然界それ自体が神の存在について何らかの光を与えることは考えられなかった。⁽¹⁶⁾ 外的自然は《表徴》としてのみ、〈不在としての神の現存〉を示しているのであるが、その認識は自然を超えた高次の光に照らされる時はじめて可能になるというのがパスカルの立場である。

しかし、「パンセ」の中に、外的自然の〈表徴性〉に関してもあまり多くの指摘が見られないのは、パスカルが彼の「キリスト教弁証論」を、自然神学的方法に対抗して構想したことにその一因があるのであろう。パスカルにとっては、外的自然よりもむしろ内的自然、すなわち人間の本性（自然性）に興味の中心がおかれていた。アレキサンドル・ヴィネ Alexandre Vinet の有名な定式に従えば、《人間から出発して神に至る》こと、すなわち人間性内部に現出する諸矛盾を別決して、その諸矛盾・相反が必然的に神の探究の契機となっていることを

証明するというのが、パスカルが取ろうとしていた方法であった。⁽¹⁷⁾ その目的のために、彼の「キリスト教弁証論」の第一部を形成するはずであったと考えられる諸断章（特に第一写本の「空虚」⁽¹⁸⁾ から「最高善」にいたるまでの綴りに収められている諸断章）において、パスカルは《神なき人間の悲惨》・《人間性が墮落していること》を、《人間性そのもの》によって、すなわち人間の存在様態の現象学的記述によって描き出そうとしたのであった。

人間の諸活動を一括して《気をまぎらわすこと *divertissement*》とパスカルは呼んだ。すなわち、人間は、宇宙についても、彼の住む世界についても、彼自身の存在についても運命についても、全面的な無知の中にいる。人間は存在し活動しているものの、その存在の内容は全くの無知、ひとつの空洞に過ぎない。そこで、人間はただ一人、何の《情熱も、仕事も、^{ディウエルティスマン} 気まぎらわしも、専心すべきこともなく、完全な休息のうちににおかれると》、自己のうちにある〈空洞〉を感じ、《自己の虚無、孤立、無能力、依存性、無力、空虚を感じる。たちまち、彼の魂の底から、倦怠、陰鬱、悲哀、傷心、憤懣、絶望が出

てくるであろう》(L・六二二—B・一三二)。人間存在の内奥にあるこのような《虚無》・《空虚》から眼をそらせること、それを忘れ去ること、その試みが人間の諸活動を形成する。それゆえパスカルは、狩猟、賭事、恋愛、旅行、戦争、官職、学問、世界征服などのすべての人間的活動を《気をまぎらわせること》と名づけたのであった。

しかし、この人間的諸活動、《気をまぎらわせること》にはもうひとつの側面がある。それは存在の虚無性から眼をそらせることと表裏一体の関係にあるもの、すなわち幸福、善の追求という側面である。人間の諸活動の動機は、したがって、二重のものである。《虚無》から《気をまぎらわせること》、《幸福》を求めること。

《全ての人間は幸福になることを求めている。そこには例外はない。取る手段は異なっているが、彼らは全てその目標を目指している。ある人々が戦争に行き他の人々が戦争に行かないのは、両者ともにもっている同じ「幸福への」欲求によるのであるが、それにともなっている考え方が異なっているのである。意志はその「幸福という」対象のためでなければ、最小の動きもみせない。

それは全ての人間の全ての行為の動機である。首をくくろうとする人々にいたるまでそうである》(L・一四八—B・四二五)。しかし、人間に幸福を与える《善》をどこにおくかという点については、人間の間に意見の一致が見られないのは、ひとつの大きな矛盾である。《王侯も臣下も、貴族も平民も、老人も若者も、強者も弱者も、学者も愚者も、健康な者も病人も、全ての国の、全ての時代の、全ての年齢の、全ての境遇にある人々》(同右)が、長い昔から同じ幸福を求めているものの、それを与えてくれる対象については、遂に意見の一致を見ず、《天体、天、地、元素、植物、キャベツ、ネギ、動物、昆虫、子牛、蛇、熱病、ペスト、戦争、飢饉、悪徳、姦通、近親相姦》(同右)などがそれぞれ神の代りとみなされ、人間にとっての《最高善》と考えられた(考えられていた)という矛盾、なかでも、《神にも理性にも自然そのものにもこれほど反することはないにもかかわらず、自殺までも》が、《善》とみなされるといふ最大の矛盾、このような矛盾を含む人間状況が開示しているのは人間の二重性に他ならない。存在の《虚無性》の裏には幸福への強烈な志向があるという、人間の本性がもつ

この二重性は、同時に自然界オキケルにおける人間の位置のもつ二重性でもある。この点をふまえてパスカルは次のように述べる。

《人間とは一体いかなる怪物なのか？ 何という怪異、何という混沌、何という矛盾的主体、何という驚異であろうか？

全てのものの審判者にして、無能力な蚯蚓。真理の保管者にして、不確実な掃きだめ。宇宙の栄光にして、宇宙の屑。

このもつれを誰がほどくのだろうか？》(同右)

このもつれ、人間存在の矛盾を解く鍵は、やはり《表徴》という概念である。人間は神から創造されたという意味では偉大であり、原罪を犯して神から呪われ楽園を追放されたという点から見れば悲惨であるが、この二重性は人間存在に深く刻印されており、人間の全ての行為の動機となっており、この点から見れば、人間の《氣をまぎらわすこと》、《幸福》への志向は、絶対的真理(神)への希求の表徴であると理解される。それゆえ、パスカルは、《表徴》について述べている断章において次のように断言している。

《人々の日常生活は聖人たちの生活と同じようなものである。La vie ordinaire des hommes est semblable a celle des saints. 彼らはいずれも自分たちの満足を求めているのであり、その満足を置く対象が異なっているだけである。その満足を求める行為を妨げるものを彼らは敵と呼ぶ……》(L・二七五—B・六四三)

ここには《自我はにくむべきものである》(L・五九七—B・四五五)と語ったパスカルが徹底的に非難し攻撃した、人間の《利己心 amour propre》が新たな光によって照らされ、ある意味では復権させられている。この復権は、人間存在の《表徴》的解釈によって可能となったのである。パスカルはまた、幻影的価値をつくり出す《虚偽と誤謬の主》としての《想像力》についても、人間性の墮落それ自体の現表的表現である《邪欲》についても、同じく《表徴》的解釈を行ない、⁽²⁰⁾これらを、否定しつつ肯定しつつ否定しているのである。例えばパスカルは《邪欲》について次のように述べている。

《邪欲はわれわれにとって本性的 naturelle なものとなり、われわれの第二の本性 notre seconde nature となった。われわれのなかには二つの本性がある。ひとつ

は善の本性であり、ひとつは悪の本性である。神はどこにいるのか？ あなたのいないところに、そして神の国はあなたのなかにある……》(L・六一六―B・六六〇)そしてまた、

《表徴的なもの。

邪欲ほど愛 *charité* に似たものではなく、また反するものはない……》(L・六一五―B・六六三)

人間の墮落・腐敗の具体的表現である《邪欲》も、このようにして、《二重の意味》をもつ《符号》であることが明らかになる。それゆえバスケルは、《人間はその盲目とその邪欲のなかにひたっている》(L・一四九―B・四三〇)と述べながらも同時に《邪欲》のもつ能動的性格を認めて、《邪欲》自体が、《人間の偉大さ》の《表徴》であることを主張したのであった。

三

《表徴》としての真理

以上、われわれは、《表徴》の二つのレベルを見てきた。《表徴としての聖書》、《表徴としての自然―本性》である。以上のように見るならば、バスケルの「パンセ」

における「世界の解説」の方法が、《表徴》概念の上につくられたものであることは明白である⁽²¹⁾。

しかし、バスケルにとっての《表徴》は、単に《聖書の解説》、《自然―本性の解説》のための操作的概念にすぎないと考えてよいのであろうか？

《表徴》がバスケルに対してもっていた意味はより深刻なものであったとわれわれは考える。

《表徴》についてのバスケルの思想が最も包括的に表明されている、「パンセ」の一断章(L・二七〇―B・六七〇)の末尾に、バスケルは次のように記している。

《そしてキリスト教徒は聖変化の秘蹟を自ら自分たちの目指している栄光の表徴と解する》

バスケルの用語を用いて言い換れば、《聖変化の秘蹟》は《表徴するもの figurant》であり、《栄光》は《表徴されるもの figure》である。しかしこの《表徴されるもの》は、キリスト教徒にとっても明白に理解されるものではなく、そこに《表徴するもの》である《聖変化の秘蹟》の、教会内における存在理由の一面がある。バスケルはすでに、ユダヤ人の教会堂である《シナゴーク》について次のように述べていた。

《表徴は真理が現われるまで存続した。それは〔真の〕教会がそれを約束する模写あるいは現実という形で、常に目に見えるものとして存在するためであった》(L・五七三—B・六四六)

すなわち、《表徴するもの》は、《表徴されるもの》が、その全き実在を露わにするまで存在しつづけなければならぬ。《聖変化の秘蹟》を中核とする《真の教会》もまた、その意味では、ひとつの《表徴》という面をもっていることは疑いえない。パスカルは《教会のなかでは、真理は覆い隠されており、表徴との関係において認められる》(L・八二六—B・六七三)と述べている。

ここにパスカルの《表徴》の構造が明らかにされていると言えるであろう。すなわち、パスカルの《表徴》とは、《表徴するもの》と《表徴されるもの》との無限の連鎖である。《シナゴグ》は《表徴するもの》であり、カトリック教会はそれに対して《表徴されるもの》であるが、その《カトリック教会》も、神の《栄光》に対しては《表徴するもの》である。このような連鎖は、キリスト教徒——霊的ユダヤ人——《自然宗教の範囲内での唯一神の崇拜者》という形においても辿ることができよ

う。

さて、このようにして《表徴》が《表徴するもの》と《表徴されるもの》の無限の連鎖であり、《表徴されるもの》の最終項である、真の实在は《自らを隠す神》として、《不在による神の現存》をあらゆるものによって示しているとするならば、人間にとって《真理》とは何であろうか？

ここでわれわれは、パスカルの「パンセ」における、《表徴》概念の発生について考えてみなければならぬ。未完のまま放棄された「奇蹟についての手紙」の草稿のひとつに、《表徴》に関する次の二つの文章が見出される。

《教会の表徴 figure de l'Eglise としては愛をもって語られ、また表徴にすぎないがゆえに憎しみをもって語られたシナゴグは、神との間に正しい関係を有していた時には、崩壊に瀕しても再興された。このようにしてそれは表徴であった》(L・九〇三—B・八五一)

《太陽は万物を照らすというような贖罪の一般性の表徴が示すのは、ある全般的性だけであるが、異邦人を除外してユダヤ人が選ばれたというような除外の表徴は、除

外そのものがあることを示している》(L・九一〇—B・七八一)

この草稿は一六五六年の秋から冬にかけて書かれたとほぼ確実に推定されている。⁽²²⁾それは、ポール・ロワヤル修道会とイエズス会との対立抗争が最も激化した時期にあたり、また、十月十六日新教皇アレキサンデル七世がジャンセニウスの「アウグスチヌス」に含まれているとされる「五箇条命題」の異端宣告の再確認を行なうという、ポール・ロワヤル側にとっては手痛い打撃が加えられた時期である。パスカルが「キリスト教弁証論」の計画に本格的に取りかかる約半年前に書かれている「奇蹟⁽²³⁾」⁽²³⁾についての手紙」の中でも最も初期のものともみなされるこの草稿には、右に引用した断章とともに、「真理」についての次のような思想が書きつけられていることも注目⁽²⁴⁾に価するであろう。

《ピロニスム。

この世においては、ひとつひとつのものは、部分的に真であり、部分的に偽である。本質的真理はそうではない。それは全面的に純粹であり、全面的に真である。混合が本質的真理を破壊し消滅させる。何ものも純粹に真

ではなく、かくして、純粹に真理という意味からいえば、何ものも真ではない。殺人を悪だというのは真だ、と人はいうであろう。その通りである。というのは、われわれは悪と虚偽とはよく知っているからである。しかし、人は何を善いものというのだろうか？ 純潔か？ 私は否という。なぜなら世界は終つてしまふであろうから。

結婚か？ 否、禁欲の方が善い。殺さないことか？ 否、なぜなら無秩序は恐るべきものとなるであろうし、悪人は善人をすべて殺すであろうから。殺すことか？ 否、それは自然を破壊することであるから。われわれは、真も善も、部分的にしか所有しておらず、しかも悪と虚偽がそれには混合しているのである》(L・九〇五—B・三八五)

実体的真理を全面的に否定しているこの断章が、《表徴》の概念が記されたおそらく最も古い断章と同じ草稿に書かれているという事実⁽²⁵⁾は、《表徴》の思想が、実在的真理観の否定の上に樹てられ展開させられていることを考え合わせる時、非常に重要な意味をもつように思われる。

教会内の論争に積極的に参加し闘つてきたパスカルが、

右の草稿を書いた時期に、教会内における〈真理〉の問題について根本的な考察を迫られていたことは、同年九月〜十二月にかけて、ルアネー公爵 Duc de Roannez 兄妹に宛てて書かれた一連の書簡の中にもうかがわれる。十月末に書かれたと推定される、第四の書簡は、全文が《隠れたる神》と《表徴》の問題にささげられている事実も重要であるが、よりわれわれの興味を惹くのは十一月に出されたと推定される第六の書簡の内容である。この書簡でパスカルは、先に述べた新教皇の「五箇条命題」の異端宣言の再認に触れて《彼地(ローマ)でより悪いことが行なわれなかつたのは奇蹟です。真理の敵には真理を圧迫する意志も力もあるのですから》と述べるが、同時に、教皇と教会に対する彼の態度を次のように表明する。

《あなたの御手紙のなかに、教皇との一致についての愛らしい熱意が認められ心から賞讃いたします。肢体なしには頭が生きられないように、頭がなければ肢体は生きることができません。そのどちらから分離する人はもはや身体をもたず、イエス・キリストに属していないことになるのです。〔……〕私たちは、全ての徳、殉教、

苦行、全ての善行も、教会を、そしてまた教会の首長たる教皇との合体 communion を外にしては無益なものであることを知っているのです。

私は決して教皇との合体から離れないでしょう。少なくとも神にそのための恩寵をお祈りいたします。そうでなければ、私は永遠に破滅してしまおうでしょう。私はあなたに一種の信仰告白をしているのです。その理由は分りません。しかし取り消そうとは思いませんし、書き直そうとも思いません。》²⁴⁾

教会と教皇に対するこの忠誠の意志表明は「プロヴァンシャル・第十七の手紙」(一九六七年一月二十三日)においても再度繰り返されることになり、そして教会と教皇に対する忠誠は死に至るまで変ることがなかった。いうまでもなく、真理が《表徴》として与えられているという立場に立たず、《真理を偶像とする》立場から見るとならば、パスカルのこのような態度はひとつの矛盾と見えるであろう。教皇は、あきらかに《真理の敵》の側に握っているからである。しかし、〈真理〉を實在的に把握することを、パスカルは強く否定している。《二つの対立する真理の関係を理解することができずに、一方を

容認することは他方と除外することであると信ずる《態度に、バスカルは異端の根源を認めていたのである》⁽²⁶⁾。

とするならば、バスカルにとつての《真理》とは何か？ ジェズイットの腐敗した道德観を攻撃し、ジャンセニスムの正統性を擁護するバスカルの主張の真理性とは何か？ ポール・ロワヤル修道院で起きた《聖荊の奇蹟》がジャンセニストの正しさを証明する《真の奇蹟》であるという基準は何か？ より一般的にいうならば、

《表徴するもの》と《表徴されるもの》との無限の連鎖、この《表徴の世界》にあつて、自らの真理性の主張とは何を意味するのか？

バスカルは一六五七年九月、ローマ教皇庁が彼の「プロヴァンシャル」を禁書目録に入れたことに対して、次のように書く。

《沈黙〔を強制されること〕は最大の迫害である。聖徒たちはけつして沈黙しなかった。召命 vocation が必要であることは事実であるが、自分が召されているか否かを知るのは会議の裁定によつてではなく、語らずにはいられないと、こうと la nécessité de parler である。》

(L・九一六—B・九二〇)

この一節に、バスカルの《真理》観が、僅か数行に圧縮されて表出されている。《召命が必要であることは事実だが》、つまり、《真理》とは神の意志である。その《意志》は何によつて知られるか？ 《語らずにはいられないこと》、すなわち、語るべき、擁護すべき《真理》への確信によつてであり、愛によつてである。ルアネー兄妹への第三書簡で、バスカルは、《罪が罪であるその理由は、それが神の意志に反していることだけである》と述べているが、その《神の意志》は、神が《自らを隠し》ているがゆえに、究極的には、人間が自らの《真理性》に対して抱く確信と愛であるといわねばならない。

しかしこれは偏狭なファナチスム、ドグマチスムをただちに意味するものではない。この点については、宛名も日付も伝えられていない、バスカルの一通の手紙を引用しなければならぬ⁽²⁷⁾。この手紙は、おそらくバスカルの真理観を知る上で最も重要な資料であるが、ここでは次の一節を引用するのにとどめておこう。

《したがつて、われわれを動かしているのが神であるかどうかを正しく認識するためには、われわれの内部の動機よりもむしろ外部との関係におけるわれわれの態度

について、よく自己を調べる方が良い。というのも、もしわれわれが内部のみを調べるならば、例えそこに善のみを見出すとしても、その善が真に神から由来するものであるかどうかについては確かなことはいえないからである。しかし、われわれが外部との関係において自分を検討するならば、すなわちわれわれが外側からの障害を忍耐をもって受け入れているかどうかを考察してみると、われわれの情念を動かしている力 *motus* と、われわれの情念に対して障害物を与えている力との間に、同様の精神 *une uniformité d'esprit* があることが示される。

そしてわれわれの情念を動かしているのは疑いなく神であるゆえ、障害物をつくっているのも神であると謙虚に考えることができるのです。

しかるに、何ということか！ われわれは真理のために闘う使命のみをもっているのに、人は真理を勝利させる使命をもっているかのごとくに行動している。勝つという欲望は「人間にとって」非常に本性的なものであるので、真理を勝利させるといふ欲望にとりつかれると、しばしばその欲望を真理とみなし、神の栄光を求めているが、事實は自己の栄光を求めていることになる。障

害にどのように耐えるかが、その点について最も確かなことを教えてくれるように思われる。というのも、結局われわれが神の秩序のみを望んでいるのならば、かならずやわれわれは神の慈愛の勝利と同じように、神の正義の勝利をも希望するであろうし、そしてまた、われわれが義務を怠ることがなければ、真理が認められる時も、真理が打ち破られる時も、同様の気持でいることになる。何故ならば、真理が認められる場合には神の慈愛が勝利し、真理が打ち破られる場合には神の正義が勝利するのであるから。

この手紙の中に、〈表徴の世界〉における〈真理〉の位置が確定されていることは明らかであろう。〈真理〉とその対立物とは、相互に、《表徴するもの》、《表徴されるもの》として、その間に緊張を生み出しているのである。その緊張こそが〈表徴としての真理〉、すなわちより高次の真理であると考えられるのである。このような〈真理観〉からは、フアナチスム、ドグマチスムに落ち入ることなく、しかし徹底的に〈真理〉のために闘いつづける態度が生まれる。

《悪い人たちというのは、真理を知っているが、自分

たちの利害がそれと一致する限りにおいてのみそれを支持し、そうでない場合には真理を放棄する》(L・七四〇―B・五八三)

とパスカルは責めているが、彼が《署名問題》について、死ぬまで一貫した態度を堅持したこと、彼の真理観との間には美事な一致があったというべきであろう。

〈表徴〉はパスカルの「パンセ」の世界を覆いつくしている概念であるが、それは単に〈聖書〉あるいは〈人間存在〉の解釈のために用いられる、知的・操作的概念ではなく、パスカル自身の〈真理〉のための闘いをその背景にもつきわめて重要な思想である。〈教会〉すなわち〈真理〉の地上における具現者であり、そこに〈真理〉の現存があるべき教会内に生まれた激しい論争を通じて、パスカルは、〈表徴〉としての真理」という思想に到達したのだと考えられる。〈表徴〉と〈真理〉とを二つのものとして理解することは誤りである。それは、〈不在〉としての神の現存」という、現世における神のあり方を、〈神の不在〉あるいは〈神の現存〉のどちらかとして把えることの誤りに通じるであろうし、〈聖変化

の秘蹟〉の中にキリストの現存を認めないカルヴァンの異端とも相通することになるであろう。〈表徴〉がすなわち〈真理〉であり、それは〈表徴するもの〉と〈表徴されるもの〉との間の緊張を意味し、この〈表徴の世界〉に生きる人間にとっての義務は、〈表徴するもの〉から〈表徴されるもの〉へ至ろうとする不断の努力であり、この努力が実は〈表徴〉としての真理」それ自体であると理解する時、パスカルは、教会内の論争について、次のような明晰な認識をもつことができたのである。

《それゆえ、平和が正当である時と、平和が不正である時とがあるのだ。「平和の時と戦いの時がある」と記されている。それらの時を見分けるのは真理に対する関心である。しかし真理の時と誤謬の時がある訳ではない。その反対に、「神の真理は永遠にとどまる」と記されているのである》(L・九七四―B・九四九) (完)

(1) cf. 「パンセ」断章ラフヌマ Lafuma 版(以下L・と略す)六―フランシシュヴィック Brunschvicg 版(B・と略す)六十。

(2) cf. Jeanne Russier: *La foi selon Pascal*, P. U. F. 1949, Tome 2, pp. 393~396.

(3) *ibid.*, p. 394.

- (4) cf. Julien—Eymard D'Angers: Pascal et ses précurseurs. Nouvelles Editions Latines 1954, p. 178.
- (5) cf. J・四八三—B・七二六、J・四八五—B・七二二、その他。
- (6) *ibid.*, また、L・三六七—B・六七二。
- (7) J・二一七—B・六五〇、L・二五二—B・六四八。
- (8) cf. J・七三三—B・八六二。
- (9) cf. J. Rüssler, op. cit., pp. 380~391.
- (10) *ibid.*, p. 384, note. 1.
- (11) cf. L・二六〇—B・六七八、L・二六五—B・六七七、その他。
- (12) L・一九九—B・七二。
- (13) 中村雄二郎・「パスカルとその時代」東京大学出版会。一九六五年、一〇一頁。
- (14) cf. Julien-Eymard D'Angers: Pascal et ses Précurseurs. chap. II. L'Armée des Apologistes. chap. III. Les Armes. en particul. pp. 65~69.
- (15) J・二〇一—B・二〇六。
- (16) cf. Henri Gouhier: Pascal et les humanistes de son temps. (*In* Pascal Présent, G. de Bussac, Clermont-Ferrand, 1962) pp. 98~99.
- (17) cf. Victor Giraud: Pascal, l'homme, l'oeuvre, l'influence. E. de Boccard 3e éd. 1904, pp. 168~169.
- (18) 第一号本の問題に關して註しては、Louis Lafuma: Recherches pascaliennes, Ed. de Luxembourg 1949. Controverses pascaliennes, Ed. de Luxembourg. 1952. La Copie 9203 (*In* Ecrits sur Pascal, Ed. de Luxembourg, 1959) 簡單には、拙稿「パスカルと歴史」(「言語文化」第六号 一橋大学語学研究室刊・一九七〇年、七〇頁~七一頁) 参照。
- (19) cf. 拙稿「Blaise Pascal: Les Pensées における《想像力》に ついて」(日本フランス語フランス文学会「フランス語フランス文学研究」第十三号、一九六八年)。
- (20) 拙稿・「ブローズ・パスカル『パンセ』における《政治学》と《想像力》」。(「言語文化」第五号、一九六八年、六三頁) 参照。
- (21) H. Gouhier, op. cit., pp. 95~104.
- (22) L. Lafuma: Controverses pascaliennes p. 29.
- (23) cf. 拙稿「パスカルと歴史」前出、二〇二頁。
- (24) Oeuvres de Blaise Pascal. Grads Écrivains de la France, Hachette, Tome VI. pp. 216~217.
- (25) *ibid.*, p. 343.
- (26) cf. J・七三三—B・八六二。
- (27) この手紙の日付に關しては、
R. Pascal: Opuscules et Lettres, notes de L. Lafuma, Aubier 1955, p. 173.
- (28) パスカルの「パンヤ」に於ける《表徴》の重要性を

《個人的印象ではあるが》として、重要視したのはフォル
チュナ・ストロウスキーであったが、彼はこの問題につい
て詳しく述べなかつた。cf. Fortunat Strowsky: Les
Pensées de Pascal, Mellotée, 1930, p. 167. アンリ・グ
イエは、パスカル死後三百年祭の記念講演の第二部でこの
問題について詳しく触れている。cf. Pascal présent. の

前出論文 pp. 79, 104. しかし、彼は、パスカルの真理観
と表徴の問題には言及していない。
(29) 「異端」というのはパスカルから見ることである。
パスカルの思想とカルヴィニスムに関してはまた別に述べ
なければならぬであろう。

(一橋大学専任講師)